

2022年6月5日 ^{ペンテコステ} 聖霊降臨日礼拝

メッセージ「I will be back」

岡嶋千宙伝道師

聖書 ヨハネによる福音書 14章 15-18、25-27 節

現在、わたしは、あるプロジェクトに携わっています。わたしを含めて9名が関わっているのですが、今、関係者の間で軋轢^{あつれき}、溝が生まれています。それぞれが、プロジェクトを良いものにしようという思いで活動しているのですが、表明される言葉や行動が相手方に誤って受け取られ、互いの思いが行き違い、亀裂が生じているのです。はじめのうちは小さなものでした。ですが、今では、修復が難しいと感じられるほどの大きな溝になっています。関わっているのは、皆、イエスを、神様を信じるキリスト者です。そこに生まれる溝。いや、信じるからこそ、なのかも知れません。ですが、なぜ、そのような溝が生まれ、争いが生じるのか、神様がいのなら、とくに解決策が見いだされて当然なのに。と、やるせない思いにかられます。わたくし事を越えて、教会の枠を越えて、世の中を見渡してみると、やはり、人々の関係性が崩れ、争いが生まれているという状況が数多く見受けられます。皆さんの中にも、今まさしくそのような状況にある、という方もおられるでしょう。今でこそ落ち着いてきていますが、新型コロナウイルスの地球規模での感染拡大と、それによる経済格差の増長。ウクライナ・パレスチナ・ハイチなど、途絶えない紛争の中で失われていく命、生活空間、また、紛争の余波による物価上昇と世界経済の混乱。温暖化による地球環境の不安定化と、必然と言われている近い将来の危機に対する各国間の足並みの不一致。争い、仲たがひ、不一致。この世の中は、まさしく、混沌に陥っていると言えます。だからこそ、という訳でもないのですが、これまでに経験したことのない閉塞感に世界中が覆われている今、「いったい神はどこにいるのか」「神の御子であるイエスが約束してくれた救いはどこにあるのか」と叫びたくなります。今日は聖霊降臨節。そんな叫びを胸に抱くわたしたちは、どんなメッセージを聖書から受け取ればよいのでしょうか。

突然、激しい風が吹いて来るような音が天から起こり・・・家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、他国の言葉で話した。(使徒言行録 2:2-4)

聖霊の降臨ということで最も知られる聖書の言葉は、今読んだ「使徒言行録」のものでしょう。その後の記述によると、この時を境に、今で言う「教会」の原型が築かれ、その教会を中心にして、イエスのもたらした福音のメッセージが、エルサレ

ムやその周辺だけではなく、その他の国や地域にも広められるようになります。とても劇的で生き生きとした描写。突風と大音響と炎のような舌ということで、感覚に訴えかけてきます。後の時代のわたしたちでもそんな感覚を得るのですから、実際にその場にいた人たちは、もっとビンビンと来るような、生々しい体験をしたのでしょう。それは、人を動かす力に満ちた体験であって、何かが変わる、変えることができる、そんな期待を起こすものであったはずです。本日与えられた御言葉には、突風も、大音響も、炎のような舌も出てきません。人々が異なる言語で語り出すということもありません。「使徒言行録」の記述が、動きに満ちた、動的な、ダイナミックなものであるとすれば、本日の御言葉「ヨハネ福音書」の記述は静かな、波風の少ない、穏やかなものです。

先週の礼拝において「ヨハネ福音書」17章の御言葉を元に、メッセージを語らせていただきました。その中で、13章から16章には「最後の晚餐」の席で、イエスが弟子たちに向けて語った言葉が記されている、とお伝えしました。今日の御言葉も、その言葉の一連として語られたものです。イエスが生きている内に語られたものであり、この点だけでも「使徒言行録」の記述とは異なることがわかるでしょう。ここに至る前の段階から、場面の背景を確認します。最後の晚餐の席で、イエスは、弟子たちの中に自分を裏切る人がいることを指摘します(13:21)。そして、指摘を受けたその者、イスカリオテのユダは、食事の席から離れて、外へ出ていきました(13:30)。ユダが出ていった後、イエスは、自分がこの世からいなくなることを、弟子たちの前からいったん姿を消し、彼らのそばにいらなくなることを告げます(13:33)。告げられた弟子たちは動揺し、彼らのうちの中心人物、ペトロは「自分もイエスのあとを追って付いていく」と宣言します(13:37)。しかし、このペトロの言葉に対して、イエスは彼が「後に、自分との関係を3度否定することになる」と告げたのでした(13:38)。ユダの裏切りの告知、弟子たちのもとを離れることの予告、そしてペトロによる否認の予知。喜びに満ちていた食事の席に、暗雲が立ち込めます。弟子たちの心の中にざわつきが生じていたことでしょう。そんな状況で、イエスは、「真理の霊」(14:17)あるいは「弁護者」(14:16)が弟子たちと共に、永遠に一緒にいると語ります。その弁護者たる聖霊は、弟子たちの「内に」居続け(14:17)、イエスが弟子たちのもとを去ったあとでも、彼らにイエスのことを思い起こさせる、と語ったのでした(14:26)。先程見たとおり「使徒言行録」の聖霊は、人々の感覚に訴えものでしたが、「ヨハネ福音書」においてイエスが語る聖霊は、そうではありません。「使徒言行録」の聖霊がイエスとは別の存在で、イエスの働きとはまた別のことを、力強くなしてくれそうなイメージを持つのに対して、ここで語られる聖霊は、イエスとは不可分の、むしろイエス自身であるか

のような、そのイエスが、肅々とこれまでの歩みでなしてきた業をこれからも続けていくような感じを与えます。

ここで思い返されるのは、先週のメッセージにおいて語られた、イエスが祈りの中で求めた「一つとなる」関係です。それは「内にある」という言葉によって特徴付けられるものでした。17章でイエスが信仰者のために祈り求めたのは、内面を含めた全人格的な交わりの中に、一人ひとりが、それぞれに特色を持ったままで、共に生きることのできる関係性でした。この関係性を、イエスは、本日の御言葉が記されている14章でも語っています。「私が父の内におり、あなたがたが私の内におり、私があなたがたの内にいる」(20節)。17章のイエスの祈り、および14章20節での語りを踏まえて、本日の御言葉を見つめると、イエスが語る聖霊・弁護者とは、そのような関係を生み出す存在であり、また、生み出した後に、その関係の中であって、人々に、イエスを、神を、イエスの言葉を、イエスの業を、そして、神の愛を思い起こさせる存在として考えることができます。その聖霊の働き、および、聖霊の働きによってもたらされるイエスの存在は、将来への約束として語られるだけではありません。17節「あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたのもとにいる(あるいは、「とどまる」)」。18節「わたしはあなたがたのところに戻って来る」。27節「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える」。ここで用いられている動詞は、すべて現在形です。「知る」「とどまる」「戻る」「残す」「与える」。これらのことは、今現実に行われていることとして語られているのです。過去でも、将来でもなく、今まさに、この時に起こっている聖霊の働き、そして与えられるイエスの存在。

ヨハネの記述する聖霊・弁護者の働きを考えると、見逃してはならない、もう一つ重要な要素があります。14章では、弟子のうちの何人かが、イエスに語りかけています。イエスの語りを聞いているのは、弟子集団であり、複数の者たちですが、その中で、3名がイエスに語りかけているのです。5節のトマス。8節のフィリポ。そして22節のイスカリオテではないユダ。この3名、いずれもヨハネ以外の福音書では、単に名前が記されるだけの存在です。他の福音書では弟子集団の中心人物であるペトロが際立ち、他の弟子たちは、周辺的なキャラクター、いわゆる「モブキャラ」に過ぎません。ですが「ヨハネ福音書」では、そんな周辺キャラクターが、イエスの語り相手とされ、彼らの声がかっきりとイエスの耳に届けられ、そして、この場面に響いているのです。トマス、フィリポ、イスカリオテではないユダ。弟子たちの中でも周辺の人物たちが語るなかで、弁護者である聖霊の働きが伝えられる。一説には「ヨハネ福音書」が宛てられた共同体・教会が、ペトロなどの中心人物たちとは別の系譜によって建てられた教会であることを示すものである、と説明され

ます。おそらく、そうなのでしょう。ですが、より重要なのは、聖霊の働きがなされる
ところでは、誰も排除されないということです。むしろ、周辺的な人々、社会の中で
排除された一人ひとりのもとに、その者たちの内に、弁護者がいて、イエスの存在
を、彼らのそばに、彼らの間にもたらしてくれるのです。

一人ひとりのそばに、苦しみや悲しみの中にある人、困難に直面している人、声
を消されている人、弱い立場に追いやられた人、そんな人たちのそばに、弁護者た
る聖霊がいて、イエスを思い起こさせる。関係を築いてくれる。それは、過去のこと
ではなく、将来の約束でもなくて、今現在起こっていることとして。そうは言われて
も。「今、実際、わたしの人間関係はめちゃくちゃ。誰もそばにいてくれない。誰もわ
たしの声を聴いてくれない。見捨てられている。孤独。孤立。」そう感じている方も
おられるでしょう。もし、孤立しているのなら、どこにも先へと進む道筋を見いだせ
ないのなら、少し、留まってみませんか。別の角度から、自分に与えられている関係
を、あの人との関係を見つめ直してみませんか。あるいは、もうとっくに忘れていた
あの人のことを、余裕がなくて連絡をとることができなくなっているあの人のことを、
思い返してみませんか。その関係は、人間の視点からすれば絶望的で、破壊し尽
くされ、修復不可能なものなのかもしれません。でも、神の視点、イエスの視点か
らすれば、全く異なって見えているはずで。わたしたちは、壊れた関係や、絡み合
った関係に目を向ける度に、嫌な思いを抱き、ざわつきます。そんなわたしたちに、
イエスは語ります。「心を騒がすな。おびえるな」(14:27)。壊れた関係が、別の
角度から見たら、実は、新しい関係へと繋がるための道だった、ということもあるで
しょう。まだ想像すらできない、全く新しい関係が、これから与えられようとしている、
ということもあるでしょう。イエスは、そんな関係が、すでにあなたたちに与えられて
いる、と語ってくれているのです。今、こうして、礼拝という場で、互いに与えられて
いるのも、弁護者である聖霊がもたらしてくれる関係のひとつです。一人では築き
上げられないけれども、誰かとならば、あるいは別の時に、別のところであれば。聖
霊に導かれて、イエスと共にある、この時であれば。わたしは、イエスをキリストとし
て信じる者たちの集まりである教会は、そのような関係を一人ひとりが持つことが
できる場なのだと信じています。そうであるようにと、イエスの思いが込められた大
切な大切な、コミュニティなのだと信じています。だから、時に、いや常に、教会が
人々の間に出向いていくことが必要なのでしょう。そして、人々に、今ある関係性に
疲れ果て、絶望している人たちに、弁護者たる聖霊が伝えるイエスのメッセージを、
語っていく必要があるのだと感じます。イエスは、わたしたちのもとに、わたしたち
のそばに、わたしたちの内に、戻ってきています。そのイエスが語る福音のメッセ
ージを、隣人に伝えに参りましょう。